

展示・収蔵品より

美を知る 323

県立博物館では「鏝野目久米蔵コレクション」と呼ばれる膨大な数の考古資料を収蔵している。鏝野目氏は1897(明治30)年、河辺郡仁井田村(現秋田市仁井田)の生まれ。幼少の頃、生家の畑(地方遺跡)で土器や石器を拾って考古学に興味を持ち、以来昭和50年代まで県内の遺跡で土器や石器などを集めた。

鏝野目久米蔵コレクション～藤株遺跡～

縄文の暮らしを追う

コレクションは、1976(昭和51)年と79(同54)年の2度にわたり鏝野目氏本人から寄贈された。採集地などの情報が記され、資料としての価値あるものとなっている。一部を当館の人文展示室で常設展示し、現在は、縄文時代早期～晩期の遺跡とされる藤株遺跡(北秋田市脇神)の資料を展示している。

藤株遺跡の周辺には、世界文化遺産となった伊勢堂岱遺跡をはじめ、縄文遺跡が多く存在している。藤株は古くより石器や土器が出土する場所として学会で紹介され、専門家の間では知られていた。80(同55)年には県教育委員会による詳細な発掘調査が行われた。その中で、火葬された

状態で埋葬された首のない女性の人骨と頭部の作られていない土偶は、注目を集めた。鏝野目氏が藤株遺跡を訪れたのは、30(同5)年4月。当時部分的な調査が行われてはいたが、広大な遺跡のほとんどは未調査であった。氏がここで採集したものは、コレクションの中の30件ほど。一部を紹介したい。

縄文土器はその出現から終焉まで、主として煮炊きに用いる深鉢形土器が作られ続いていたが、後期(約4千年前)の頃から壺形土器、注口土器、浅鉢形土器など器形が多様になった。写真2は「注口土器」、写真3は「台付鉢形土器」と呼び、晩期(約3千年前)のものである。現代の器にもつながる形をしているが、装飾性が強い。これらの土器は食事だけではなく、儀礼に関わる道具としての役割もあったようだ。

考古資料は、はるか昔の人々の暮らしぶりや、精神性を知る手がかりとなるものである。当館人文展示室に展示されている考古資料を見ながら、当時の人々の様子を想像していただきたい。

(県立博物館学芸主事・渡部 猛)

写真1

石匙 縄文時代
(左・長さ4・6センチ、幅6・7センチ、右・長さ4センチ、幅3・2センチ)



注口土器 縄文時代晩期
(左・口径16.4センチ、高さ9.8センチ、右・口径6.6センチ、高さ10.6センチ)

写真2



写真3

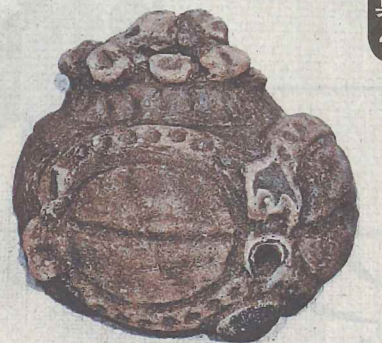


写真4



写真5

(写真3) 台付鉢形土器 縄文時代晩期
(口径12.5センチ、底径8.3センチ、高さ9.8センチ)
(写真4) 遮光器土偶頭部 縄文時代晩期
(縦7センチ、横7.6センチ)
(写真5) 岩版 縄文時代晩期
(縦10.1センチ、横7.7センチ)

✕ 県立博物館が収蔵している鏝野目久米蔵コレクションは、考古資料を中心に649件。人文展示室で北秋田市・藤株遺跡の出土品を8月31日まで公開している。入場無料。開館時間は午前9時半～午後4時半。月曜休館(祝日の場合は翌日)。同館☎018・873・4121